

# 英語ディベートを通した、主体的に考え表現する力を育む取り組み

福井県立若狭高等学校

大橋夕紀

水谷友梨

## 1. はじめに

近年、アクティブラーニングという言葉が飛び交って久しいが、アクティブラーニング自体が目的ではなく、それを通した活動の中で、自ら考え伝えることのできるアクティブラーナーを育てることが必要である。生徒が英語を用いて自分のことを伝えたいと思えるのはどのような授業か、またツールである英語が、生徒自身が深い思考をする中でどのように関わっていくことができるのか実践・省察していきたいと考えた。英語ディベートでは英語は完全にツールとなり、ディベートというゲームに勝つために決められたテーマに対して自分の意見を伝え合う。若狭高校では長年、ディベートに対しての取り組みが行われている。この裾野を広げ、また、深めて取り組むことで、生徒の『自分のことを伝え合う力』を伸ばして生きたいという思いで1年間取り組んだ。

## 2. 授業における英語ディベートの取り組み

### TTでの授業における英語ディベートの取り組み（第1学年）

2学期のALTとの授業を中心に取り組んだ。ディベートは、自分の言いたいことを英語で伝える力を育むためには非常に効果的だと考える。特に、論理的思考力を高める効果が大きいと考え、実践に取り組んだ。

#### 《実践内容》

今回は、アカデミックディベートができることを目標とした。アカデミックディベートでは、各チームに、コンストラクティブスピーチ、アタック、ディフェンス、サマリー＋クエスションの役割をするメンバーが必要になる。一つ一つの役割を把握するのは複雑で、特に初期の指導が難しく、楽しさを生徒が感じられるようになるまでかなり時間がかかることが予測された。そのため、以下に示したような工夫をして、生徒の様子を伺いながら行った。

#### 《実践上の工夫》

- ・毎回のワークシートを作成し、1時間の目標事項がわかりやすいように工夫した。
- ・全体の流れが複雑なため、コンストラクティブスピーチからサマリーまでの役割を、1クラスで1～2つまでとした。
- ・トピックは出来るだけ生徒たちにとって身近なものにし、取り組みやすさを考えた。
- ・9月には、県外でディベートに積極的に取り組んでいる学校へ視察に行き、どのように指導しているのかを学ぶとともに、授業での取り組み方についてアドバイスを頂いた。

#### 《実践の記録》

以下のような順序で授業を進めた。

#### 1 限目…ディベートとは？

ディベートの全体像と、ディベートをすることでどんな力が身につくのか。理論的に話すにはどんなことが大切か。

2 限目…コンストラクティブスピーチとは？

効果的なコンストラクティブスピーチを作るには何が必要か。

3 限目…クエスチョン→アタックとは？

クエスチョン・アタックをするときの効果的な話し方、表現。

4 限目…アタックとは？②

アタックをより強くするためには何が必要か。

5 限目…アタック→クエスチョンとは？

アタックに対して、後のディフェンスのために効果的なクエスチョンのためには何が必要か。

6 限目…ディフェンスとは？

既存のアタックに対してディフェンスしてみよう。

7 限目…サマリーとは？

とにかく、今までの流れをまとめてみよう。

授業で使用したプリント（1 限目）

WAKASA SENIOR HIGH SCHOOL ENGLISH DEBATE PROJECT FOR 1<sup>ST</sup> GRADE STUDENTS 2016

# 「英語ディベート」 Class \_\_\_\_\_ No. \_\_\_\_\_ Name: \_\_\_\_\_

## Lesson 1 What is English Debate?

1. Ice Breaking

2. ディベートって何？

3. 自分の考えを効果的に伝える方法「AREA」

- A . . . ASSERTION ( )
- R . . . REASON ( )
- E . . . EXAMPLE ( )
- A . . . ASSERTION ( )

4. ディベートの仕組み

- ①Constructive Speech (立論=意見+理由)
- ②Question (立論に対する質問)
- ③Attack (攻撃=立論に反論する)
- ④Defense (防御=攻撃されたところを守る)
- ⑤Summary (総括=全体を振り返って再度主張する)

アカデミックディベート全体像の説明

WAKASA SENIOR HIGH SCHOOL ENGLISH DEBATE PROJECT FOR 1<sup>ST</sup> GRADE STUDENTS 2016

### Let's try! ② Let's Debate in Japanese with your group members!!

4人（もしくは3人）の班を作って日本語でディベートをしてみましょう。  
役割を順番に交代して、班のメンバーが全ての役割ができるようにしましょう！

「高校生は学校での携帯の使用を許可させるべきか」

"Should high school students be allowed to use their cell phones at school?"

A. Constructive Speech (立論) (30sec)
Thinking time (30sec)
B. Question (質問) (30sec)
Thinking time (30sec)
C: Attack (攻撃) (30sec)
Thinking time (30sec)
D: Defense (防御) (30sec)

1 限目はまずは、日本語でディベートしてみました。

「英語ディベート」 Class \_\_\_\_\_ No. \_\_\_\_\_ Name: \_\_\_\_\_

Lesson 3 Question and Attack part2

アタック特有の表現の確認。

1. Warm Up

2. Practice with your partner!! 英語で正しく言えるかな？

	英語	日本語	○ or ×
A	It's not true.	正しくありません	
B	It's not always true.	いつも正しいとは限りません	
C	It's not important.	重要ではありません	
D	It's not relevant.	関係ありません	
E	It's the opposite.	それは逆です	

3. Let's attack following opinions using A~B above.じゃんけんしてペアでやってみよう！

★Winner → read ★ and choose one reason from ①~⑤

★Loser → attack your partner's idea using A~E and add your opinion.

★I think living in the city is better than living in the country (田舎より都会で住むほうが良い)

- ①because we can have happier life in the city.
- ②because we can meet famous people such as singers and actors there.
- ③because I like shopping so I can go to shopping malls easily.
- ④because we can lead healthier life in the city.
- ⑤because we can earn more money in the city than in the country.

※相手の意見に合わせて上のA~Eを上手く使い分けられるかな？

※相手の言った意見の番号をメモしよう↓

★You said living in the city is better because ( ) but (

because (

For example, (

Therefore, I don't think living in the city is better than living in the country.

実際に適切な表現を用いて、根拠のあるアタックをする練習。

終わったら交代！

《 考察 》

1 学年全体で取り組み、どのクラスでも生徒は頑張っていて取り組んでいたが、やはり初めて聞く言葉も多く、アカデミックディベートの複雑さに戸惑っていた。特に、2, 3 限目のクエスチョンやアタックでは、制限時間内にクエスチョンを思いつくことができず、フラストレーションを感じている様子が伺えた。アタックでも、机間巡視の中で、「先生、アタックってどこにアタックしたらいいのかわかりません。」という声がよく聞かれた。そのため、4 限目にアタックについて再度取り組む時間を作り、すでに作成されているコンス

トラクティブスピーチに対して、プリント上の表現を用いながらアタックを作成し、自分のアタックのどの部分が強く、どの部分が改善されるべきかを話し合う時間を設けた。友達と話し合う中で、「なるほどね～」と強いアタックの在り方が分かった生徒が増えたように感じた。

ただ、コンストラクティブスピーチ～サマリーまでを、一続きにチーム戦で行うのは、かなり難しいと感じた。一つ一つの役割は随分理解が進んだようだったが、それに精いっぱい、授業中だけで試合を行うことに限界を感じたのも事実である。本校では、3学期の終わりに、日本語での討論会があり、その行事を経ると討論の仕方やその意義が深く理解できる生徒が増えるのではないかと思う。そのため、あせらず今学年は英語ディベートの基礎を学ぶ期間とし、来年度引き続き取り組むことで、クラス内でディベートの試合を行うことが可能になるのではないかと考えている。

### 3. 全国英語ディベート大会に向けた取り組み

若狭高校は、「福井県高校生英語ディベート大会」に毎年参加しており、本年度で第9回大会を迎えた。2年国際探究科の生徒を中心に、1・2年生の希望生徒が英語ディベートに取り組んでいる。今年度は33名が参加し、4チームに分かれて活動した。授業で英語ディベートを扱っていることや、前年度参加生徒の活躍などにより、英語ディベートに興味を持つ生徒が多く、年々参加人数が増えてきている。

#### <本年度の論題>

『The Japanese government should adopt a social security system that provides a basic income to all Japanese citizens.』

「日本政府は、日本のすべての市民に、ベーシック・インカムを給付する社会保障制度を採用すべきである。是か非か。」

このように、年々難しい論題になっている。社会問題を扱う論題が多く、英語科教員だけでは対処できない部分がある。そのため、社会科・国語科教員にもサポートをしていただいている。

<校内での活動>初顔合わせのミーティングで、前年度参加生徒からのアドバイスをもらい、今年度参加生徒の意欲を高めている。また、いきなり英語でディベートすることは難しいため、まずは日本語でディベートを行っている。ディベートは資料集めが重要であるため、インターネットや図書・新聞を使つての資料集めに時間をかけている。生徒が所属している部活との兼ね合いも考えながら、放課後や休日を利用して活動している。資料が揃ったら、まずは日本語で立論を作っていく。「現状分析」、「発生過程」、「重要性・深刻性」の3段階に分けて立論を作る。筋が通つた立論を作成するために、英語科教員はもちろん、社会科・国語科教員にもアドバイスをいただいている。英語科教員だけでは対処できない論題が増えてきているため、他教科によるサポートで英語ディベートは成り立っている。

## 英語ディベート –まずは日本語でやってみよう！–

6/22 (木) 放課後

お忙しい中、ジャッジを引き受けて下さりありがとうございます。以下の日程で行います。初めての討論の生徒もいますので、まだまだたどたどしい議論かも知れませんが、ざっくりと切り込んでいただくようお願い致します。フローシートやコメントシートはこちらで用意致します。

時間	場所	対戦チーム (是:否)	ジャッジ・アドバイザー	進行・計時
16:20~	2W1	A vs B	堀川先生	2年生×2人
17:10	2W2	D vs C	渡辺先生・大橋恵先生	2年生×2人
17:15~	2W1	A vs C	山田先生	ゲームに出ない人で
18:00	2W2	D vs B	渡辺先生・大垣先生	ゲームに出ない人で

日本語ディベートが終わったら、英語ディベートに入る。ALTの力も借りながら、また、ディベート用語集を参考にしながら日本語で作った立論を英語に変えていく。すぐに修正ができるように、ワードで立論を作成している。立論作成と同時に、アタックやディフェンス、サマリーも考えていく。自分たちの立論をサポートするグラフや資料は相手チームやジャッジに分かりやすいように、スケッチブックなどで提示している。

AD1 Labor force population will increase

a) PS

① Now, many people give up having babies because they don't have enough money to raise their children.

According to 国立社会保障・人口問題研究所,

[QUOTE] 60.4% give up having babies because they don't have enough money.  
[UNQUOTE]

② Declining in the number of children is serious issue in Japan. And it is said that if declining in the number of children advances, labor force population will decline.

According to 日本経済新聞,

[QUOTE] Labor force population will decline by 10 million in 10 years.  
[UNQUOTE]

b) EF

① Japan adopt BI.

② According to 内閣府,

[QUOTE] We need 13 million and 20 thousand yen to raise one child in 22 years.  
[UNQUOTE]

And according to our plan, children can receive 20 million 40 thousand yen by the time they are 22.

③ They can have their babies.

④ The number of children will increase, and labor force population will increase, too.

c) IM

If labor force population decrease, there are many bad effects on Japan.

For instance, Japan will not able to get enough income tax revenue, and production will decrease if labor force population decrease.

So Japan should adopt BI to increase labor force population.

<校外での活動>

校内だけでなく、校外での活動も行うことで、刺激を受け、よりよい英語ディベートを目指している。今年度は全部で4回、県が開催する研修会があった。そこでは、英語ディベートについて学び、他校と練習試合をすることができる。教員もジャッジ講習会があり、ALTと練習試合のジャッジを実際に行う。ジャッジの基準が分かることで、生徒に的確な指導ができるようになる。近江兄弟社高校では、練習会が定期的に行われており、その中で論題について学んだり、県外の高校と練習試合をしたりすることができる。その練習会をきっかけに県外の高校と接する機会を得ることができ、滋賀県を中心に県外の高校と練習試合を行うことができている。また、残念ながら、今年度は全国大会に参加することができなかったが、教員のみで茨城まで全国大会を見学しに行った。全国大会レベルのデ

活動記録		
日付	内容	場所
6月4日	2016年度 第2回 近江兄弟社高校 練習会	ヴォーリズ学園 近江兄弟社高校
6月19日	第1回福井県研修会	敦賀高校
7月17日	第2回福井県研修会	高志高校
8月11日	練習試合(若狭高校を含め8校参加)	滋賀県立虎姫高校
8月21日	第3回福井県研修会	武生高校
8月28日	2016年度 第4回 近江兄弟社高校 練習会	ヴォーリズ学園 近江兄弟社高校
9月10日	練習試合(若狭高校を含め3校参加)	若狭高校
9月18日	第2回全国高校生英語ディベート 大会関西ブロック予選in和歌山	和歌山県立向陽高校
10月2日	第4回福井県研修会	藤島高校
10月22日	練習試合(若狭高校を含め8校参加)	ヴォーリズ学園 近江兄弟社高校
11月5日	第9回福井県高校生 英語ディベート大会	福井大学
12月11日 12月12日	第11回全国高校生 英語ディベート大会 ※教員のみ見学	常磐大学 高等学校

ィベートは圧巻で、後半の試合になればなるほど、どちらが勝っても負けても不思議でないゲームばかりであった。ぜひ、来年は若狭高校も全国大会出場を目指してがんばりたい。

<今後の課題について>

年々、英語ディベートへの関心が高まり、参加人数が増え、また、校内・校外活動も増え、よりよい活動になってきている。しかし、今後、参加人数がさらに増えていくよう

あれば、選考を行い、人数を絞って活動していかなければならない可能性もある。また、論題が非常に難しいため、英語教員だけでは対応できなくなっている。校内・校外活動、参加人数を考えると、部活と同等の活動である。2, 3名の教員のみでの関わりでは持続可能な活動にはならない。今後、持続可能な活動にするためにはどうしたらよいか考えていく必要がある。

#### 4. おわりに

「1. はじめに」でも述べたように、英語ディベートは、生徒の考えて伝え合う力を伸ばすために非常に良い取り組みである。しかし、県全体で見ると取り組んでいない高校も多く、ハードルが高いと感じられていることも事実である。その理由は、先ほど「3. 全国英語ディベート大会に向けた取り組み」にもあったように、論題の難易度が高いこと、英語ディベートを経験したことのある教員が多くはないこと、指導に時間がかかり、生徒の活動としてもかなり大掛かりになることなどが考えられる。しかし、普段の授業においても少しずつ取り組むことで、教員側も生徒側もそのハードルは低くなり、学年全体、英語科全体の取り組みとして行うことも可能ではないだろうか。来年度に向けて更に取り組みを工夫し、生徒が英語を自分の言葉として用いて活躍できる場面を増やしていきたい。